



患者の容体に応じた外来化学療法の入院化について

1. 本院における化学療法の取り扱い経緯

▶ H23年度 以前

高額注射薬を用いた化学療法は、入院の場合DPCにより **包括** されてしまうため、大赤字に。

外来での実施を推奨

▶ H24年度 以降

本院では**外来での実施を今なお推進**
H27年度**外来化学療法室6チェア増**
(18チェア → 24チェアに)
さらに化学療法は **外来化**

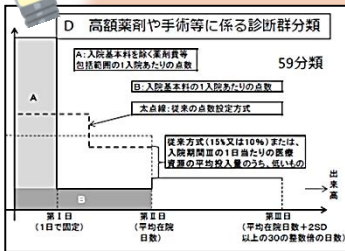
H24年度 診療報酬改定

高額薬剤に係る診断群分類を試行的に導入（D方式）

⇒ 入院基本料を除く薬剤費等包括範囲の点数を入院期間 I の点数に組み込む設定

H30年度改定でもこの分類は継続中

— 入院での実施により大きく報酬を得られる設定がある —



2. 今後の化学療法の取り扱いについて（依頼）

現在**無理に**外来での化学療法を実施しているような場合は…

- ① 患者様の容体
- ② 患者様の希望
- ③ **外来で実施した場合の診療報酬 と 入院で実施した場合の診療報酬との差（どちらが多いか）**

以上を考慮した上で **外来で実施／入院で実施** するか化学療法の治療決定をお願いいたします



3. 対象となる化学療法は…

診療科毎・レジメン毎で、外来で実施した場合と入院で実施した場合の、診療報酬シミュレーションを別紙に添付しております。こちらを治療決定の際の参考にいただければ幸いです。

※ 各種会議において審議後承認済〔第7回予算・経営戦略委員会(H30.11.14)、第7回運営会議(H30.11.15)、第7回診療科連絡会(報告；H30.11.21)〕

